

特別支援教育を踏まえた小・中学校の体育教員養成に対する大学教員の意識

Training for elementary school and junior high school physical-education teachers based on special needs education from university teachers' point of view

金山千広*
山崎昌廣**

Abstract

This study was carried out with the aim of acquiring basic materials for training physical-education teachers who could provide special needs education. We conducted a survey of full-time teachers in charge of adapted sports or other similar classes in universities having training courses of elementary school teachers and junior high school health and physical-education teachers. The themes were “students’ opportunities for learning adapted sports” and “skills needed for being a physical-education teacher capable of handling children with special needs in elementary and junior high schools”. Through a paper-based questionnaire by mail, responses were obtained from 76 universities with junior high school health and physical-education teacher training courses (collection rate: 59.4%), and from 84 universities with elementary school teacher training courses (collection rate: 53.5%). The results obtained suggests the following.

1) Regarding the current state of “students’ opportunities for learning adapted sports” from university teachers’ point of view

From university teachers’ point of view, junior high school health and physical-education teacher training courses offer more lessons on skills and practices which may be applied to adapted sports than elementary school teacher training courses. On the other hand, in elementary school teacher training courses, many students take lessons on special education such as the education for children with special needs. In general education courses, there are few classes of adapted sports education. Therefore, many university teachers feel the necessity of opening the classes of adapted sports education in specialized courses, but at the same time, they feel also the difficulty thereof.

2) Regarding “skills needed for being a physical-education teacher capable of handling children with special needs in elementary and junior high schools” from university teachers’ point of view

University teachers tend to consider that elementary school teachers better understand the “disabilities” of children with special needs, while junior high school health and physical-education teachers better understand specialized content in physical education and sports. This suggests that we have to consider how the opportunity for learning adapted sports should be surely provided and what contents should be offered in the field of education and during the teacher training course.

キーワード：特別支援教育 体育授業 教員養成 アダプテッド・スポーツ 大学教員の意識

* Chihiro KANAYAMA 准教授 修士(教育学) 体育・スポーツと健康教育Ⅱ・体育教育法・芸術Ⅱ

** Masahiro YAMASAKI 広島大学大学院総合科学研究科 教授 医学博士

I 目 的

2007年より施行された「特別支援教育」に対応するための課題の1つに、小・中学校の体育授業において、アダプテッド・スポーツ教育を実践できる質の高い教師の養成がある。アダプテッド・スポーツ (adapted sports) とは、個人の身体能力、年齢、障害の有無などにとらわれず、ルールや用具を工夫して、その人に適合させたスポーツを展開することである (矢部ほか 1997)。この発想および実践は、特殊教育から特別支援教育への過渡期にある体育授業において重要な鍵概念となる (金山ほか 2007, 2008)。著者らは、特別支援教育に対応するための体育教員養成に影響を及ぼす要因として、大学の教員養成コースで展開されるアダプテッド・スポーツ教育に着目するものである。

大学のカリキュラムであつかわれるアダプテッド・スポーツ教育は共通教育科目から専門教育科目まで幅広く及んでおり、その内容も学部や学科、大学毎に特徴的である (金山・山崎 2009)。しかし、教員養成コースをもつ大学のカリキュラムであつかわれるアダプテッド・スポーツ教育に関する実証的な報告は乏しい。その中で、金山・山崎 (2009) は、中学保健体育教員免許状第一種が取得可能な大学76校 (回収率59.4%) の45%はアダプテッド・スポーツ教育関連教科を開講しているが、そのほとんどが選択科目として位置づけられていること、小学校教員免許状第一種が取得可能な大学84校 (回収率53.5%) においては、11校 (13%) のみの開講であったことを報告している。また、アダプテッド・スポーツ教育関連科目開講の割合は、取得できる教員資格に限られる大学において高く、養成コースをもつ各大学の重要性の理解の範疇において任意に展開されることを付加している。さらに、多様化する教員養成のカリキュラムの中にあっては、行政的配慮を伴って科目開講を位置づける必要性を示唆している。

この報告から、それぞれの教員養成コースにおいてアダプテッド・スポーツ教育を展開するための要因を検討するならば、該当課程のカリキュラム作成に携わる立場にある大学の専任教員が認知するところの、特別支援教育を踏まえた体育教員養成に対する考え方を明らかにする必要があることが分かる。

教員養成カリキュラムについて北神 (2001) は、

大学教員、教育長、小学校長への質問紙調査から、養成課程で習得しておきたい内容の重要度に関する三者の意識の差を報告している。また、特別支援教育の展開に際しては、小・中学校における通常学級を担当する全ての教員が発達障害等、特別な配慮を伴う子どもに関する「知識」や「スキル」が必要である (是永ほか 2007)。さらに学校現場に目を向けると、障害児を対象とした体育の授業形態は、小・中学校共に全て通常学級で実施している学校が多く、次いで小学校ではチームティーチングの導入が、中学校では特別支援学級との分離が位置づいているとの報告がある (金山ら 2008)。これらから、特別支援教育を踏まえた体育授業においては、障害児への配慮とともに、インクルーシブ体育を含めた授業のマネジメントスキルの習得が必要であることが分かる。しかし、大学教員が特別支援教育を踏まえた体育授業の実際をどのようにとらえているかは、解明されていない。

したがって、本研究では、カリキュラム作成に携わる立場にある大学の専任教員が認知する小・中学校体育授業の状況と、それに対応するための教員養成に関する意識を明らかにすることとした。具体的には、「教員養成コースに在籍する学生のアダプテッド・スポーツを学ぶ機会」と「小・中学校 (一般校) に在籍する障害児に対応できる体育教員に必要なスキルや能力」の観点からカリキュラム作成に携わる立場にある大学の専任教員が考えるところによる体育教員養成の特徴を把握することとした。その目的は、学校体育においてアダプテッド・スポーツ教育を実践できる質の高い教師を養成するためのカリキュラム構築に関する基礎資料を得ることであった。

II 研究方法

1. 予備調査の実施

本調査研究の調査票作成に際しては、この種の先行研究が皆無であることを考慮し、質問項目策定を目的に予備調査として各大学のシラバスから情報を得ることとした。

1) 対象

ここでは、2007年4月現在、通学課程において、中学の保健体育教員免許状第一種が取得可能な大学123校 (文部科学省 2007) より、教育学部またはそれに類する経緯をもつ学部を有している57校 (国立

54校、私立3校)を対象とした。

2) 方法

2007年度開講用シラバスにて現状を集約する方法をとった。資料収集は Web で公開されている場合はそれを用い、17大学については不明な点を教務担当部署に文書にて問い合わせた。問い合わせ期間は2007年10月である。

2. 本調査の実施

1) 対象

本調査の対象は、中学保健体育教員免許状第一種が取得可能な大学128校、小学校教員免許状第一種が取得可能な大学157校である。またそれは、それぞれの養成課程をもつ国内全ての大学にあたる(文部科学省 2007)。但し、両コースを有する大学についてはコース別に対応したため別々にカウントした。

2) 方法

郵送法による質問紙調査を実施した。回答は本調査研究の趣旨に伴い、各大学の教員養成コースにおける専任教員より求めた。またそれは、障害者スポーツ論等の担当教員、障害者スポーツ論等が非常勤である場合の世話人教員、体育科教育担当教員、コース内教務担当教員のいずれかである。

3) 調査項目

質問項目は、まず、各大学の基本的属性、障害者スポーツ論等のアダプテッド・スポーツに直接的に対応している科目の開講状況を尋ねた。次に予備調査のシラバス分析結果を経て作成した大学教員が考えるところの「教員養成コースに在籍する学生の障害者スポーツを学ぶ機会」14項目を加えた。各項目内容については「全くそのとおり」～「全くあてはまらない」までの5点リカート尺度で尋ねた。これらに、同様のプロセスで作成した大学教員が考えるところの「小中学校(一般校)に在籍する障害児に対応できる体育教員に必要なスキルや能力」に関する17項目を加えた。そこでは北神(2001)の報告を参考に、各質問項目に対する回答を「特別支援学校以外の体育教員がどの程度できると思うか」について「完全にできる」～「全くできない」までの5点リカート尺度を用いた。回答校の基本的属性、アダプテッド・スポーツの授業開講状況については、金山, 山崎(2009)に詳しい。

4) 調査期間

調査期間は、2008年5月～6月であり、回答は、保健体育教員養成コース76校(回収率59.4%)、小学校教員養成コース84校(回収率53.5%)より得た(ただし、記入漏れがあったため各質問項目により回答数は異なる)。回答校の内訳を表1、表2に示した。

5) データ処理

質問項目毎、リカート尺度を有する項目については、平均値を求めて情報を集約し、関連要因ごとに比較した。全ての解析は SPSS15.0J for windows を使用した。

表1 本調査：中学校(保健体育)教員養成コースにおける回答校の属性

カテゴリー		度数	(%)
予備調査	教員養成主体(対象)	36	47.4
	その他(非対象)	40	52.6
	合計	76	100.0
地域	北海道・東北	9	11.8
	関東	18	23.7
	北陸・甲信越	6	7.9
	東海	8	10.5
	関西	12	15.8
	中・四国	10	13.2
	九州・沖縄	13	17.1
	合計	76	100.0
設置主体	国立	36	47.4
	公立	1	1.3
	私立	39	51.3
	合計	76	100.0
経営形態	総合大学	56	73.7
	単科大学	20	26.3
	合計	76	100.0
	コースの設置学部	教員養成系学部	30
体育・スポーツ系学部		16	21.1
健康・福祉系学部		5	6.6
文学系学部		3	3.9
総合・発達・人間科学等複合系学部		18	23.7
経済・経営・産業系学部		2	2.6
その他		2	2.6
合計		76	100.0
コースの設立案	1959年以前	28	36.8
	1960年代	8	10.5
	1970年代	4	5.3
	1980年代	3	3.9
	1990年代	1	1.3
	2000年代	27	35.5
	無回答	5	6.6
	合計	76	100.0
コースの規模(学生数)	50人未満	39	51.3
	50人以上100人未満	14	18.4
	100人以上150人未満	7	9.2
	150人以上200人未満	4	5.3
	200人以上250人未満	2	2.6
	250人以上300人未満	1	1.3
	300人以上	7	9.2
	無回答	2	2.6
	合計	76	100.0

表2 本調査：小学校教員養成コース回答校の属性

カテゴリー		度数	(%)
地域	北海道・東北	8	9.5
	関東	24	28.6
	北陸・甲信越	7	8.3
	東海	10	11.9
	関西	15	17.9
	中・四国	11	13.1
	九州・沖縄	9	10.7
	合計	84	100.0
設置主体	国立	30	35.7
	公立	3	3.6
	私立	51	60.7
	合計	84	100.0
経営形態	総合大学	59	70.2
	単科大学	24	28.6
	無回答	1	1.2
	合計	84	100.0
コースの設立年	1959年以前	23	27.4
	1960年代	7	8.3
	1970年代	13	15.5
	1980年代	6	7.1
	1990年代	1	1.2
	2000年代	30	35.7
	無回答	4	4.8
	合計	84	100.0
コースの規模 (学生数)	50人未満	12	14.3
	50人以上100人未満	31	36.9
	100人以上150人未満	20	23.8
	150人以上200人未満	11	13.1
	200人以上250人未満	5	6.0
	250人以上300人未満	1	1.2
	300人以上	2	2.4
	無回答	2	2.4
合計	84	100.0	

6) 倫理的配慮

調査票には研究の趣旨、目的、得られた情報の扱いに関する説明書を付けた。また、調査は無記名で実施し、得られたデータは統計的に処理することを加えた。なお、用紙の返送により調査への同意を得たと判断をした。

III 結果と考察

1. 予備調査の結果

予備調査により集められたシラバスは、芳鐘ほか(2005)によるシラバス分析の概観を参考に、授業科目名および内容から、障害児(者)、高齢者及び、体育、スポーツの組み合わせを言語表現の特徴として捉え、記載状況を把握した。言語表現の特徴から把握したアダプテッド・スポーツ教育に関する教科科目開講の状況を表3に示す。

対象57校のうち、「障害者スポーツ論」等、アダ

表3 アダプテッド・スポーツ教育に関する教科科目の開講状況

	開講有	隔年開講	別途教科の一部	開講無	合計
度数	13	3	4	37	57
(%)	22.8	5.3	7.0	64.9	100.0

プテッド・スポーツに直接関与する授業内容を開講していたのは13校であった。その全ては選択科目として位置付けられ、単位数は2単位が多かった。また、開講校のうち2校は、(財)日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導員(初級)資格認定校であった。これらに加えて、隔年ではあるが、「障害者スポーツ論」を開講している学校が3校あった。さらに、別途授業において“障害者スポーツ”に関する内容を部分的に併記している学校が4校あった。これらは、ダンスで知的障害に関する内容を表記しているケース、地域スポーツ論で障害者スポーツを取り上げたケース、コーチング論で同じく障害者スポーツを取り扱ったケースである。また、障害者スポーツの他に、高齢者を対象とした授業名称が1校、共通・教養科目としてバリアフリー、障害者スポーツというテーマで開講されていたものが1校あった。シラバスの記載状況を11項目にカテゴライズし、表4のように把握した。この予備調査にて集約された情報は本調査の質問項目の設定に応用した。

2. 本調査の結果

予備調査で収集したシラバスの概観から作成した、大学の専任教員が考えるところによる「教員養成コースに在籍する学生のアダプテッド・スポーツを学ぶ機会」と「小・中学校(一般校)に在籍する障害児に対応できる体育教員に必要なスキルや能力」に関する質問項目の結果を報告する。

1) 大学教員が考える「該当コースに在籍する学生のアダプテッド・スポーツを学ぶ機会」の現状について

ここでは、該当課程のカリキュラム作成に携わる立場にある大学の専任教員が考えるところによる「教員養成コースに在籍する学生障害者スポーツを学ぶ機会」について尋ねた。結果を表5に示す。質問は予備調査の情報を応用した14項目からなり、各項目内容については「全くそのとおり」～「全くあてはまらない」までの5点リカート尺度にて回答

表4 シラバスにみたアダプテッド・スポーツ関連教育科目の内容

障害者のスポーツ指導	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な障害を持った人たちの運動・スポーツの指導について（組織、指導者等） ・本授業では、障害者スポーツの、現状や基礎的な知識、指導技術を学ぶ。実際に車椅子をつかう。 ・障害者のスポーツ指導者育成
ボランティア	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの育成 ・ボランティア活動による Adapted Sports 支援 ・ボランティア計画作成
安全管理	<ul style="list-style-type: none"> ・障害者のスポーツと指導上の留意事項 ・障害者のスポーツと安全管理 ・障害児・者のための運動・スポーツプログラムの立案と安全管理 ・身体障害者の運動実施上の注意
障害者スポーツの実技・体験	<ul style="list-style-type: none"> ・車椅子バスケット（体育館） ・ユニホック（体育館） ・ボッチャ ローリングバレー等 ・高齢者・障害者を対象とした水中運動等 介助法の習得 ・卓球型 ボッチャ ローリングバレー等 ・車椅子バスケットボール ・車いす卓球・サウンドテーブルテニス ・車いすサッカー ・車いすラグビー ・車いすバスケットボール ・ユニホック ・障害者スポーツ 車いすスポーツを中心に ・バリアフリースポーツ体験（視覚を制限して歩く、走る） ・バリアフリースポーツ体験（フライングディスク） ・ダンス ・ドッチビー ・Adapted Sports の体験
障害の知識理解	<ul style="list-style-type: none"> ・障害の理解 ・障害の種類について ・障害の種類と運動の可能性 ・障害の種類と食事 ・障害者とスポーツ (1) 身体障害を中心に ・障害者とスポーツ (2) 知的障害、精神障害を中心に
関連領域	<ul style="list-style-type: none"> ・セルフエフィカシー ・リハビリテーション ・障害予防 ・高齢者（高齢者体育指導論）
障害者スポーツ実習・実践	<ul style="list-style-type: none"> ・社会体育施設での業務を体験する。 ・障害者スポーツの現場にてローンボウルス、身体障害児を対象とした水泳指導の介助技術の習得 ・現場にて障害者スポーツ体験実習 ・障害者が実施できるスポーツの体験を通じて理解する。
コミュニケーション・スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・障害者スポーツの指導方法 スポーツの持つ可能性 接し方 求められる創造性
授業内容にて部分的に取り扱う	<ul style="list-style-type: none"> ・総合演習・海外の特別支援教育の臨床（ベトナム・アメリカ） ・コーチング論（障害者とスポーツ） ・障害者福祉（障害者や高齢者とスポーツ） ・レクリエーション（障害者スポーツやレクリエーションの活動） ・生涯スポーツ論（障害者におけるスポーツ指導） ・リハビリテーション（障害者と運動） ・地域スポーツ論（地域社会における生涯スポーツ、女性スポーツ、高齢者スポーツ、障害者スポーツ等） ・体育社会学（ステイグマ・障害者とスポーツ） ・ヘルスプロモーション（障害者とスポーツ）
介護等体験	<ul style="list-style-type: none"> ・介護等体験（障害者との交流）
体育実技・ニュースポーツ	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースポーツ ・バリアフリースポーツ ・ユニバーサルスポーツ ・フットベースボール ・グラウンドソフトボール

を求めた。

結果、小学校教員養成コースについては、⑫カリキュラムにおける展開、⑬用具や教材、⑭教員の確保、の開講に関する困難性を示す質問項目の平均値が高くなっている。また、質問項目②受講者数、④部分的展開、⑦実技等、の一般体育実技や共通教育科目での取り扱いも少ないと意識されている。一方で、質問項目①専門課程の中での関連科目設定関する必要性は高く認識される傾向にある。

中学校体育教員養成コースについては、小学校と同じく開講の困難性を示す質問項目の平均値が高い傾向にある。しかし、それ以上に専門課程において科目設定の必要性を強く感じており、ニュースポーツなどアダプテッド・スポーツに応用しやすい科目が設定されているとの認識も強い。また、フィールドワーク等においてアダプテッド・スポーツを経験しやすい授業も設定されている様子である。小学校

同様に一般体育実技等においてアダプテッド・スポーツを経験する機会は乏しい。②受講者数、⑥研究テーマとしての取り組み、⑩障害に対する知識等を取り扱う授業への参加、の質問項目における平均値が低い傾向にあったことから、該当コースの学生がアダプテッド・スポーツを学ぶ機会は、開講科目選択や総合演習等における課題設定に対する学生自身の積極性に依拠しているようにも捉えられる。

次に、「教員養成コースに在籍する学生の障害者スポーツを学ぶ機会」における各質問項目の平均値を小学校教員、保健体育教員の各養成コース別に比較した結果をみると、全体的に中学校保健体育教員養成コースの平均値が高い傾向にある。特に、質問項目③④の専門課程および共通科目での学ぶ機会に統計的有意差を認めたことから、両コース間においては、学ぶ機会に対する認識が違うことが明らかになった。また、質問項目⑦⑧が示すように、ア

表5 大学教員が考える「学生がアダプテッド・スポーツを学ぶ機会」

質問項目	小学校教員養成コース			保健体育教員養成コース		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD
①専門課程の中に“障害者スポーツ論”等、障害のある人のスポーツに関連した科目を設定する必要性が高い。	82	3.52	1.14	75	3.96	0.98 *
②教員養成コースにおいては、障害者スポーツに関する知識や情報を含む授業の受講者が多い。	80	2.33	1.04	74	2.68	1.29 p=0.65
③専門課程で開講されている講義・実技においては、部分的関与を含めて、障害者スポーツに関する内容を扱う授業がある。	81	2.62	1.43	75	3.03	1.41 p=0.74
④共通教育科目においては、部分的関与を含めて、障害者スポーツに関する内容を扱う授業が開講されている。	83	2.18	1.40	74	2.84	1.53 **
⑤教員養成コースの介護等体験において、障害者のスポーツや体育に関連した実践を経験してくる学生がいる。	82	3.00	1.26	74	3.16	1.28
⑥総合演習や卒業論文作成において、障害者スポーツをテーマとして取り組む学生が増えている。	82	2.43	0.97	74	2.58	1.03
⑦一般体育実技において、障害者スポーツを体験する機会を取り入れた授業がある。	83	1.94	1.34	73	2.37	1.50 p=0.60
⑧ニュースポーツや高齢者スポーツに関連する授業等、障害者スポーツに応用しやすい授業（講義・実技）を開講している。	83	2.96	1.43	73	3.92	1.37 ***
⑨フィールドワーク等で、障害者スポーツのイベントなどに、参加（ボランティアを含む）を推進している授業がある。	83	2.92	1.42	73	3.37	1.41 *
⑩障害児教育等、障害のある子どもにかかわる内容を含めた授業を受講する学生が多い。	82	3.30	1.21	73	2.90	1.20 *
⑪日本障害者スポーツ協会公認 障害者スポーツ指導員認定校として資格を与えるための制度やカリキュラムが必要である。	82	2.74	1.19	72	3.04	1.25
⑫現状のカリキュラムにおいては、障害者スポーツに関する授業の現状以上の展開が難しい。	83	4.01	1.12	74	3.84	1.06
⑬学内においては、障害者スポーツに必要な体育用具や教材が十分でない。	83	4.02	1.19	74	3.88	1.25
⑭障害者スポーツ論等を担当できる教員の確保が難しい。	83	3.82	1.31	74	3.68	1.39

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

アダプテッド・スポーツに応用しやすい実技や実践経験に結びつきやすい授業の提供も中学校体育教員養成コースが高いようである。小学校教員養成コースでは、障害児教育など、障害のある子どもに関わる内容を含めた授業を受講する学生が多いと受けとめられている。

教員養成を目的とした場合のアダプテッド・スポーツ関連授業は、小・中学校の教育現場における取り組みにつながる事が重要である。学校におけるアダプテッド・スポーツ教育の全国調査報告（金山ほか 2008）によれば、一般校に在学する障害児の多くは、知的および精神機能の障害である。また体育授業において配慮を必要とする児童生徒の存在は、学年が上がるほど増える傾向にあった。体育授業実施に関する全国的な傾向としては、インクルーシブ体育（障害のある子とない子が一緒に行く）の割合が高かった。また、小学校ではチームティーチングの導入が進んでいた。さらに、中学校では、担当教師が教科別に対応するため、チームティーチングの導入よりも、一緒に行く場合と分けて行く場合の二極化傾向にあった。このことを踏まえて、教員養成コースの特質を考慮した場合、大学で提供される授業内容は、障害に対するアセスメントに加えて、小・中学校体育授業での「ねらい」や「めあて」を包括した授業全体のマネジメントに関する見解を提示する必要性を感じている。

2) 大学教員が考える「小・中学校（一般校）に在籍する障害児に対応できる体育教員に必要なスキルや能力」について

該当課程のカリキュラム作成に携わる立場にある大学の専任教員が考えるところによる「小中学校（一般校）に在籍する障害児に対応できる体育教員に必要なスキルや能力」に関する15項目について尋ねた。質問項目は、特別支援教育の概要（文部科学省 2006）、および予備調査で集約した内容と全国小中学校調査（安井 2007；安井・山崎 2008；金山ほか 2007, 2008；下村ほか 2007）を参考に設定した。各質問項目に対する回答は、北神（2001）の報告を参考に、「特別支援学校以外の体育教員がどの程度できると思うか」について「完全にできる」～「全くできない」までの5点リカート尺度で求めた。結果を表6に示す。

小学校教員養成コースでは、質問項目①の障害者スポーツを学ぶことの価値意識が高く、次いで、⑧

発達障害の理解、⑩他の教員と協力した体育授業の運営、①障害のある人に対する接し方、②障害に対する基礎知識など、障害に対するアセスメントとチームティーチング等の授業運営に関する項目が高い傾向にあった。その反面、③障害の種類やレベルに応じたスポーツ指導、⑤障害や疾病に応じた運動量の提供や援助、⑫障害者スポーツの実技指導、⑬障害者の生涯スポーツへの見通し、等障害者の具体的なスポーツ指導に関する項目が低い傾向にあった。このことは、大学における養成段階で「障害児教育」に関する授業設定の標準化と「アダプテッド・スポーツ」に関する授業開講の乏しさを反映している可能性がある。5点リカート得点の平均値においては、3.0を超えた質問項目が5項目のみであったことから、大学教員は、特別支援教育が導入された教育現場での教師の戸惑いを予想しているようにも推察された。

中学校保健体育教員養成コースについても小学校教員養成コースと同様の傾向を示したが、⑭障害者の競技スポーツ大会参加への手助けに関する項目が上位にあった。この背景には、先のアダプテッド・スポーツを学ぶ機会の結果に示されたフィールドワーク等の授業の開講状況の影響があるのかもしれない。また、⑨障害のある子どもの学習評価に関する項目が低いことが特徴的である。③障害の種類やレベルに応じたスポーツ指導、⑫障害者スポーツの具体的な指導、を示す項目も低い傾向にある学校現場での分離の背景を予想した。加えて、中学校の現場では用いられにくい⑩チームティーチングに関する項目が3.29と他の質問項目よりも高かった。該当コースにおいても小学校教員養成コース同様に5点リカート得点の平均値において3.0を超えた質問項目が4項目のみと全体的に低い傾向にあった。

「小・中学校（一般校）に在籍する障害児に対応できる体育教員に必要なスキルや能力」の各質問項目の平均値を小学校教員、保健体育教員の養成コース別に比較した結果をみると、②障害に対する基本的知識に基づいた行動や、⑧発達障害の理解、⑨障害のある子どもの学習評価に関する項目は小学校教員養成コースの教員が高く認識しており、⑫障害者スポーツの具体的指導、⑬生涯スポーツへの見通し、⑭競技大会への参加手助け、⑮障害者スポーツを学ぶことの価値、等の障害者の体育・スポーツに関する専門的な内容を問うている項目について

表 6 大学教員が考える「小・中学校（一般校）に在籍する障害児の体育授業に対応するための教師のスキル」

質問項目	小学校教員養成コース			保健体育教員養成コース		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD
①障害のある人（子ども）に対する、適切な接し方や話し方	77	3.18	0.87	72	3.01	0.90
②障害に対する基本的知識に基づいた行動	76	3.09	0.87	72	2.78	0.89 *
③障害の種類やレベルに応じたスポーツ指導	77	2.34	0.80	72	2.43	0.92
④障害のある人（子ども）向けの体育・スポーツ教材の工夫	77	2.55	0.93	72	2.57	1.00
⑤障害や疾病に応じた、運動量の提供や援助	77	2.39	0.89	72	2.57	1.06
⑥障害のある人（子ども）の運動・スポーツに関連する安全管理	76	2.62	0.99	72	2.76	1.07
⑦車椅子の操作を含めた、障害のある人の介助方法	77	2.74	0.99	72	2.60	1.04
⑧発達障害（LD、ADHD、高機能自閉症等）のある子どもの理解	77	3.25	0.86	73	2.79	0.97 **
⑨障害のある子どもの学習評価	77	2.84	0.92	73	2.48	0.96 *
⑩他の教員との協力した体育授業の運営	77	3.19	0.97	73	3.29	0.89
⑪障害の“ある子”と“ない子”を一緒にした体育授業	77	2.71	1.00	73	2.70	1.01
⑫車椅子バスケット、シッティングバレー等、その他、障害者スポーツの実技指導	77	2.03	0.96	73	2.44	1.07 *
⑬学校体育・地域スポーツの連携を含めた、障害者の生涯スポーツに対する見通し	77	2.43	0.92	73	2.73	1.03 p=0.64
⑭障害者の競技スポーツ大会参加への手助け	77	2.78	0.98	73	3.18	0.99 *
⑮障害者スポーツを学ぶことの価値意識	77	3.34	0.91	73	3.58	0.76 p=0.86

*p<0.05, **p<0.01

は、中学体育教員養成コースの教員が高く認識していた。ここでも、該当コースに在籍する学生の障害者スポーツを学ぶ機会に関する結果を反映する様子であった。すなわち、小学校教員は障害児の「障害」に関する理解が高く、中学校体育教員は、体育・スポーツの専門的内容に関する理解が高いと認識されることが示唆された。教員養成段階におけるアダプテッド・スポーツ教育に関する「機会の確保」「提供内容」の情報交換が必要である。

IV まとめ

本研究は、学校体育においてアダプテッド・スポーツ教育を実践できる質の高い教師を養成するための基礎資料を得ることを目的に、小学校教員養成コースおよび中学校保健体育教員養成コースをもつ各大学においてアダプテッド・スポーツ、もしくは、それに近い科目を担当する専任教員を対象に「学生のアダプテッド・スポーツを学ぶ機会」と「小中学校と中学校に在籍する障害児に対応できる体育教員に必要なスキル」を調査したものである。郵送法による質問紙調査により、中学保健体育教員免許状第一種が取得可能な大学76校（回収率59.4%）、小学校教員免許状第一種が取得可能な大学84校（回収率53.5%）より回答を得た。結果の要約を以下に示

す。

1) 調査票作成に際しての情報を得るという目的をもって予備調査を行った。中学校保健体育教員免許第一種取得可能コースが設置されている、教員養成系学部57校を対象に2007年度シラバスの科目名及び内容から、障害児（者）、高齢者、体育、スポーツ、の組み合わせを含む記載を把握した。それらは11項目にカテゴライズされた。

2) 大学教員が考える「学生のアダプテッド・スポーツを学ぶ機会」の現状について、中学校保健体育教員養成コースでは、小学校教員養成コースと比較して、アダプテッド・スポーツに応用しやすい実技や、実践経験に結びつきやすい授業の提供が高いと認識される傾向にある。一方の小学校教員養成コースでは、障害児教育など、障害のある子どもにかかわる内容を含めた授業を受講する学生が多いと受けとめられている。大学教員の多くは、一般体育実技や共通教育科目においてアダプテッド・スポーツ教育に関連する内容の取り扱いが少なく、専門課程での関連科目の開講の必要性を感じている様子である。ただ、その一方では設置の困難性に関する意識も強い。

3) 大学教員が考える「小中学校（一般校）に在籍する障害児に対応できる体育教員に必要なスキル

や能力」について、小学校教員は、障害児の「障害」に関する理解が高く、中学校保健体育教員は、体育・スポーツの専門的内容に関する理解が高いと認識される傾向にあった。またそれは、大学教員が感じる、それぞれの該当コースに在籍する学生のアダプテッド・スポーツを学ぶ機会に関する結果を反映する様子であった。学校教育現場および教員養成段階におけるアダプテッド・スポーツ教育に関する「機会の確保」や「提供内容」に関する検討の必要性が推察された。

付記；本稿は「学校におけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況に関する調査研究」平成18年度～20年度日本学術振興会、文部科学省科学研究補助金基盤研究(B)研究代表者：山崎昌廣の一部として行われた。また、本研究の内容は、山崎昌廣ほか(2009)学校におけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況に関する調査研究—研究成果報告書を骨子として加筆修正したものである。

この調査で用いた調査票の作成に際しては、立命館大学産業社会学部教授山下秋二先生より適切な助言ならびに深いご配慮を賜りました。ここにお名前を記して感謝いたします。

引用・参考文献

- 金山千広, 下村雅昭, 山崎昌廣 (2007) 小学校における障害のある児童の体育授業に関する研究—近畿地区の実態調査から—。聖和大学論集(教育学系 人文学系), 35 AB: 51-61.
- 金山千広, 齊藤まゆみ, 稲嶋修一郎, 山崎昌廣 (2008) 小中学校における障害のある児童生徒の体育授業に関する研究—全国の実態調査から—。聖和大学論集(教育学系 人文学系), 36 AB: 49-59.
- 金山千広 (2009) 教員養成コースにおけるアダプテッド・スポーツ教育の現状—中学校保健体育教員養成コースと小学校教員養成コースの実態—, 山崎昌廣代表, 学校におけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況に関する調査研究—研究成果報告書, 185-204.
- 金山千広, 山崎昌廣 (2009) 特別支援教育を踏まえた体育授業と教員養成—小・中学校教員養成コースにおけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況—, 聖和論集, 37: 9-18.
- 北神正行 (2001) 新免許法下における教員養成カリキュラムの在り方に関する研究—大学教員・教育長・小学校長へのアンケート調査の結果から—。岡山大学教育学部研究集, 116: 105-115.
- 是永かな子, 新井英靖, 石橋由紀子, 平賀健太郎, 水内豊和, 小島道生, 千賀愛, 吉利宗久 (2008) 日本教育大学協会研究年報, 26: 225-236.
- 文部科学省 (2007) 中学校・高等学校教員(保健体育・保健)の免許資格を取得することのできる大学。
<http://www.mext.go.jp/>
- 矢部京之助 (1997) アダプテッド・スポーツの提言。ノーマライゼーション, 12: 17-19.
- 安井友康 (2007) 小中学校における障害のある児童生徒の体育授業に関する研究—北海道における実態調査から—。北海道教育大学紀要. 教育科学編, 58(1): 165-179.
- 安井友康, 山崎昌廣 (2008) 小中学校における障害のある児童生徒の体育授業—インクルーシブな授業に向けた工夫に関する記述の分析から—。北海道教育大学紀要. 教育科学編, 58(2): 117-132.
- 芳鐘冬樹, 井田正明, 野澤孝之, 宮崎和光, 喜多一 (2005) ウェブ文書からの情報抽出に関する研究の概観—シラバスデータへの適用に向けて—。大学評価・学位研究, (1): 135-143.